

京大よいとこ一度はおいで

MCR14 期 医療疫学分野 医学博士課程 山田淑恵

「京都の大学院に行く？ お前、頭おかしくなったのか？」

去年の今頃、私を医局の大学院に誘ってくれていた尊敬する先輩ドクターに言われたセリフです。「授業料払って、なんで給料もないところに……うちの大学院のように、給料と海外留学付きの方が良くない？」と訝しがりながらも、最終的には「そこまで真剣に勉強したいと思っているとは知らなかった。頑張っておいで」と背中をおしてくれました。

私は日本では少し珍しい、北米型 ER で働く救急医です。重症患者ももちろん診ますが、救急外来に歩いてやって来るような、いわゆる一次・二次救急の患者さんをたくさん診ます。このなかで私は、「一見軽症に見えるけれど重症だった……という患者を、どうしたら見分けられるのか？」という臨床疑問を持っていました。しかし臨床をしている人ならば誰でも、このような何か漠然とした疑問を抱えているのではないのでしょうか。つまるところ私は、この疑問を解決せんと特別高い志で入学を決めた格好良い京大院生……というわけではありません。

きっかけは些細なことでした。ある日、同期の先生と飲んでいる時に、何の気なしに「なんか面白い講習会とかない？」と訊ねたところ、福島県で行われている臨床研究デザイン塾を勧められたのです。その場でスマホを操作し調べると、申込締切は今日まで！ 軽い気持ちで受講し……気づけば主催であった福原先生の教室に入っていました。

この（おそらく大きな）人生の方向転換は、この2泊3日の講習会で、臨床研究の面白さと、日々の臨床をしているだけでは想像もつかないほどの奥深さを感じたことが発端でした。好奇心旺盛な私は、これを学ばずに人生を終えるのはもったいない！ と思い立ってしまったのです。優柔不断で色々な情報を集めたがりの私には珍しく、他の選択肢に迷うこともなく京都大学への受験を決めました。日本の公衆衛生系の大学院の中では、京都大学が最も授業内容が厚いと聞いていたことが、大きな理由の一つだったと思います。私の奔放な行動を、所属する医局は温かい目で見守って下さっており、今回の大学院進学も快諾してくれました。大学院試験の合間に専門医試験もあり、少しバタバタしたものの、運良く院のお仲間に入れてもらうことができました。

一旦社会人になった身としては、長時間座って講義を聞いていられるのか不安でしたが、それも杞憂に終わりました。毎日びっしりある大学院の授業は本当に刺激的で、さすがは天下の京都大学！ です。特に MCR のハイライトであるプロマネと呼ばれる、学生が自分の研究について発表し、聴衆の先生方との質疑応

答を通して研究がより良くなるよう“揉んで”いく授業は、とても得難い経験だと思います。京大 SPH が誇る教授陣を始めとする先生方が、優しく、しかしときに鋭く指摘する内容に、臨床研究の奥深さに触れるとともに、目からウロコの日々です。また全学の授業も取ることが可能なので、来年以降には、医学部以外の授業も受けたいな……などと皮算用をはじめています。さらに私の所属する教室ではメンター（担当指導）の先生が 2 人もつき、まだ研究の素人である私に、様々なことを丁寧に教えて下さり、本当に感謝しています。

ところで、受験の時の予備面接で、一つ印象に残った内容があります。医療疫学教室の先輩方に「何か聞いておきたいことはありますか？」と問われ、「研究のことで分からないことがあった時には誰に聞きますか？」と質問したところ、皆が口々に「隣の席の人」と答えていたことです。この問答は、この SPH の特色を分かりやすく示していると思います。

私達は、課題や自分の研究で、調べても分からないちょっとしたことが出てきた時、まずは隣の席や後ろの席の同級生に聞きます。多くのことは、同じところでつまづいて解決したばかりという同期が 1 人 2 人おり、痒いところに手が届くような解答が得られます。話し合っているうちに他の同期が集まってくることもあり、それでも皆がそろって首をかしげるようであれば、連れ立ってさらに隣の 2 年生の席に向かいます。1 つ上の先輩方からは様々な解答が得られ、その知識の深さに感嘆することもしばしばです。

また前期の授業ではグループワークも多く、それぞれにラインでグループが作られました。教室や MCR 全体でのグループラインもあり、たびたびピロン♪とメッセージが来ます。その内容は様々で、

「明日はレポートの提出期限ですよ」「あっ忘れてた！」

「課題のここ、分かる人いますか？」「僕はこうやって考えてます」

「今度こんな講習会があるみたいです」「情報ありがとう！」

「勉強会しましょう」「統計ソフトについて知りたいです」「じゃあ分かるところを教えます」

「また飲み会しましょう」「やった～！」「賛成です!!」

「ちょっと京都観光しませんか？」「行きたい！」

「最近太ってきたから運動したい。京大のジムってどう？」「あそこ結構良いですよ～」

……なんだか大学生に戻った気分です。さらに言うと、さすが京都はごはんが美味しく、飲み会ばかりしている気がしないでもありません。私はお酒はあまり飲めませんが、周りが熱い人ばかりなので、しらふでもとても楽しいです。自分の属する臨床分野に対する熱い想いや、今あるエビデンスを一步進めよう！というクラスメイトのパワーには良い刺激を受けています。

他にも家族連れで近場の河原でバーベキューをしたり、クラスメイトの家でホームパーティーをしたり。大学院では、勉強ができるだけではなく、医者をしているだけでは絶対にこんな風に付き合うことのできなかった、一生付き合っていくだろう「仲間」を得ることができました。

MCR コースは老若男女の医師の集まりですが、京大の SPH の同級生たちは職種も様々です。クラスメイトには、20 代前半の看護学部卒の方と親子ほど歳の離れたベテラン医師、助産師、薬剤師に作業療法士などの医療従事者だけでなく、数学部出身者、元隕石の研究者、ジャーナリストに市議会議員、歴史研究者、それに海外からの留学生と、まさにごった煮状態です。普通に病院で勤務医として働いていたら、絶対に出会えなかったであろう人々ですが、彼らもすべて、同じスタート地点から公衆衛生や統計の勉強を始めた仲間たちです。

私自身こんな、「勉強してみたい！」という動機で進学を決めて良いのか、入学するまでは不安でしたが、非常に貴重な経験を得られた 1 年となりました。臨床研究デザイン塾を勧めてくれた勉強家の同期も、どこかの SPH に進学しようかと迷っているそうですが、SPH の“先輩”として聞かれたらこう答えるでしょう——京大よいとこ一度はおいで。